夜を賦與したるが如しとバイロンは自白せり。』

讀めば讀むほど若い捨吉は青木が書いたものゝ中に籠る獨有な情熱に動かされた。田邊の留守宅では、捨吉は今迄のやうな玄關番としても取扱はれないやうに成つた。假令僅かでも食費を入れ始めた爲に、留守を預るおばあさんから玄關の次の茶の間を貸し與へられたゝ その四疊半で彼はこの文章を讀んだ。雜誌の主筆なる吉本さんに賴んで何時かはこの文章を書いた青木といふ人に逢ひたいと思つた。その人を見たいと思つた。そしてその人の容貌や年齢や經歷を書いたものによつていろ〳〵さま〴〵に想像して見た。

延びやう〳〵としてもまだ延びられない、自分の内部から芽ぐんで來るものゝために胸を壓されるやうな心持で、捨吉はよく吉本さんの家の方へ飜譯の仕事を分けて貰ひに通つて行つた。その日まで彼が心に待受け、また待受けつゝあるものと、現に一步踏出して見たこの世の中とは、何程の隔りのものとも測り知ることが出來なかつた。何時來るとも知れないやうな遠い先の方にある春。唯それを翹望する心から、せつせと怠らず仕度しつゝあつた彼のやうな青年に取つては、ほんとうに自分の生命の延びて行かれる日か待遠しかつた。

その心から、捨吉は自分の關係し始めた雜誌の中に青木といふ人を見つけた。その心から、捨吉

は堅い地べたを破つて出て來た青木の若々しさを尊いものに思つた。青木のやうに早い春を實現し得たものはすくなくも捨吉の眼には見當らなかつた。

逢つて見た青木は、思つたよりも書生流儀な心易い調子で、初對面の捨吉を捉まへて、いきなりその時代の事を言ひ出すやうな人であつた。麹町の吉本さんの家で、例の應接間の大きなテエブルの前で、捨吉は自分の前に腰掛けながら話す四つか五つばかりも年長な青木を見た。男らしい眉の間に大人びた神經質の澁れて居るのを眺めたばかりでも、早くからいろ〳〵なところを通越して來たらしいその閲歴の複雜さが思はれる。捨吉の心を引いたものは殊に青木の眼だ。その深い瞳の底には何が燃えて居るかと思はせるやうな光のある眼だ。何よりも先づ捨吉はその眼に心を傾けた。

青木と捨吉との交際はその日から始まつた。好いものでありさへすれば假令いかなる人の有つて居るものでも、それを受納れるに躊躇しなかつたほど、それほど心の渇いて居た捨吉は、斯の新しい交りが展けて見せて呉れる世界の方へぐん〳〵入つて行つた。曾て彼が銀座の小竹の家の方

から通つて行つた數寄屋橋側の赤煉瓦の小學校の建築物は、青木も矢張少年時代を送つたといふその同じ校舍であることが分つて來た。姓の違ふ青木の弟といふ人と、彼とは、その學窓での遊び友達であつたことが分つて來た。あの幼い日からの記憶のある彌左衛門町の角の煙草屋が青木の母親の住む家であることも分つて來た。バイロンの『マンフレッド』に胚胎したといふ青木が處女作の劇詩は、その煙草屋の二階で書いたものであることも分つて來た。

そればかりでは無い。捨吉は自分の二人の友達にまで斯の新しい知人を見つけた喜悦を分けずに居られなかつた。とりあへず嘗に青木を引合せた。青木と嘗と捨吉との三人は、斯うして互ひに往來するやうに成つて行つた。

築地に嘗を見るために、捨吉は田邊の留守宅を出た。あの友達の家へ訪ねて行くと、きまりで女の兒が玄關へ顔を出す。そして捨吉を見覺えて居て、

『時ちやんのお友達。』

と呼ぶ。この女の兒の呼聲がもう嘗の家らしかつた。

『君、祖母さんに逢つて呉れたまへ。』

と嘗が言つて、それから捨吉を茶の間の横手にある部屋の方へ誘つて行つた。捨吉が友達と對ひ合つて座つて居るところから、眉の長い年とつた祖母さんを中心にしたやうな家庭の内の光景がよく見える。嘗の伯母さんとか從姉妹とかいふやうな人達が、かはるゝ茶の間を出たり入つたりして居る。さういふ多勢の女の親戚の中で、嘗が皆から力と賴まるゝ唯一人の男性であるらしいふこともよく想像せられた。

捨吉は嘗を誘つて青木の家を訪ねるつもりであつた。その時嘗は高輪の學校を卒業する頃に撮つた寫眞を取出して、捨吉と一緒にあの學窓を偲ばうとした。四年も暮した學窓は何と言つても二人に懐かしかつた。その寫眞の中には、嘗、足立、捨吉の外に、もう一人の學友がいづれも單衣ものに兵兒帶を卷きつけ、書生然とした容子に撮れて居た。

嘗は、膝の上に手を置き脛掛けながら寫つて居る足立の姿を捨吉と一緒に見て、

『僕の家に下宿してる朝鮮の名士が、この中で一番足立君を褒めたつけ。この人は出世しさうだ、

左樣言つたつけ。見給へ、この寫眞には僕も隨分面白く撮れてるぢやないか——まるで僕の容子は山賊だね。』と濃い眉を動かして笑つた。

嘗が自から評して『山賊』と言つたのは、捨吉自身の寫眞姿の方に一層よく當嵌るやうに思はれた。捨吉は友達の言葉をそのまゝ自分の上に移して、『まるでこの髪は百日髪だ』とも言ひたかつた。我ながら憂鬱な髪。ぢつと物を見つめて居るやうな狂人ぢみた眼。長いこと沈默に沈默を重ねて來た自分の懊惱が自然とその寫眞にまで上つたかと思ふと、捨吉は自分で自分の苦んだ映像を見るさへ厭はしかつた。

嘗の家へ來て見る度に、捨吉には自分とこの學友との間の家庭の空氣の相違が眼についた。下町風な生活のかはりに、こゝに女の手ばかりで支へらるゝ家族的な下宿がある。アーメン嫌ひな人達のかはりに、こゝには擧つて基督教に歸依する一家族がある。嘗の話の中には、ある女學校の

舍監を勤めるといふ一人の叔母さんの噂もよく出て來る。菅の多くの從姉妹の中には東京や横濱のミツシヨン、スクウルを既に卒業したものもあり、まだ寄宿舍の方で學んで居るものもある。菅の周圍には、これほど女が多かつた。又た基督敎に緣故が深かつた。こゝでは聖書を隱して置くやうな必要が無い。こゝでは人知れずさゝげる祈禱でなくて、叔母さんから子供まで一緒にする感謝である。クリスチヤンとしての菅の信仰が何となく自然なのも謂れのあることだ、と捨吉は思つた。捨吉はまた、嚴格な田邊のおばあさん達の許で育てられた自分と、可成大きくなるまで從姉妹と一緒に平氣で寢たといふ友達との相違を思つて見た。

友達を誘つて、捨吉は一緒にその築地の家を出やうとした。

「時ちやん、お出掛け？」

從姉妹の一人が玄關のところへ來て聲を掛けた。

「あゝ青木君のところまで。」

と、菅は出掛けに答へた。多勢居る女の兒はかはる〳〵玄關まで覗きに來た。

高輪東漸寺の境內にある青木の寓居を指して、捨吉は菅と連立つて出掛けた。

「青木君なんかですら、西洋人の手傳ひでもしなけりや、やつて行かれないのかねえ。」

と、途中で友達に言つて見た。菅も並んで町を歩きながら、

「何だか青木君もいろ〳〵なことをやつてるやうだね。普連土敎會で出す雜誌の編輯なぞまでやつてるやうだね。」

斯ういふ友達と一緒に、捨吉は薄暗い世界を辿る氣がした。若いものを慈むやうな溫暖い光はまだ何處からも射して來て居なかつた。ほんとに、皆な揃つて進んで行かれるやうな日は何時のことか、とさへ思はれた。

二人揃つて舊の學窓から遠くない高輪の方面へ青木を訪ねて行くといふことを樂みながら、捨吉はあの年長な新しい友達の複雜な閱歷なぞを想像して歩いて行つた。青木はもう世帶持だ。あの男は何もかも早い。結婚までも早い。それにしても青木等の早い結婚は、奈何な風にして結ばれたのであらう。斯く想像すると、捨吉は自分の若い心に、あの男の書いたものに發見する戀愛觀

——おそらく稀に見るほどの激情に富んだ戀愛觀とその早い結婚とを結びつけて考へずには居られなかつた。東漸寺の境内に入つて、いくつかある古い僧坊の一つを訪ねると、そこが青木の仕切つて借りて居る寓居だ。何となくひつそりとした部屋の内で、青木が出て來て、『僕のところでも子供が生れた、』といふところへ捨吉等は行き合せた。

『操。』

と、青木が他の部屋の方へ細君を見に行くらしい聲がする。『嘉代さん、嘉代さん』と細君のことを親しげに呼ぶ吉本さんの家庭を見た眼で斯の青木の寓居を見ると、左樣した氣質に反抗するやうなものがこゝにはあつて、それがまたいぢらしく捨吉の眼に映つた。こゝでは細君も呼捨てだ、青木の細君は客のあることを聞いて、赤兒と共に籠つて居た部屋の方で、いろ〳〵と氣を揉むらしい氣色がした。

『女の兒が生れた——僕も初めて父親と成つて見た——鶴といふ名を命けたが、奈何だらう。』

話好きな青木は菅や捨吉を前に置いて、書生流儀にいろ〳〵なことを話し始めた。側にある剝煙草の袋を引寄せ、それを餡豆の煙管につめて喫み〳〵話した。菅も捨吉もまだ煙草を喫まなかつた。

『菅君は好い。』

と、青木が言出した。話したいと思ふことの前には、時も場合も無いかのやうに、それを言出した。

斯う二人一緒に成つて見ると、もう一人の學友——青木と幾つも年の違ひさうもないあの足立をこゝに加へたならば、と左樣捨吉は思つた。平素から靜和な感じのする菅がこゝで見ると一層その靜和な感じのするばかりでなく、二人で面と對つて話して居る時にはそれほどにも氣のつかないやうな人好きのする性質を、捨吉は側に居る菅に見つけ得るやうにも思つた。

『菅君は好い。』と復た青木が自分で自分の激し易く感じ易い性質を傷むかのやうに言つた。『ほん

とに、僕なぞは冷汗の出るやうなことばかりやつて來た。』

『全く、菅君は好いよ。』と捨吉も言つて見た。

『何だか僕ばかり好人物になるやうだね。』と菅が笑つた。

『なにしろ君、僕なぞは十四の年に政治演説をやるやうな少年だつたからね。』と青木は半分自分を嘲るやうに言出した。

斯の青木の話を聞いて居る中に、もう長いこと忘れて居てめつたに思出しもしなかつた捨吉自身の少年の日の記憶が引出されて行つた。曾ては捨吉の周圍にもさかんな政治熱に浮かされた幾多の青年の群があつた。彼は田邊の小父さん自身ですら熱心な改進黨員の一人であつたことを思出した。鷄鳴社の機關雜誌、其他政治上の思想を喚起し皷吹するやうな雜誌や小册子が彼の手の屆き易い以前の小竹の家の方にあつたことを思出した。何時の間にか彼もそれらの政治雜誌を愛讀し、どうかすると『子供がそんなものを讀むものでは無い、』と言つて心配して呉れる年長の人達のある中で、それらの人達に隱れて迄も讀み耽つて、あの當時の論爭が少年としての自分の胸

の血潮を波打つやうにさせたことを思出した。そればかりではない、高輪の學窓に身を置いた當座まで、あの貧しいヂスレイリを羨むやうな心が、未來の政治的生涯を夢みるやうな心が自分の上に纏いたことを思出した。

『青木君にも左樣いふ時代があつたかなあ。』

と、捨吉は自分に言つて見て、今では全く別の道を歩いて居るやうな青木の顏を眺めた。

兎も角も產後の細君は部屋に籠つて居る時でもあり、復た出直してゆつくり來ることにして菅と捨吉の二人はあまり長いこと邪魔すまいとした。その秋鎌倉へ行つたといふ青木の話なぞを聞いて、やがて二人は辭し去らうとした。青木は鎌倉の方で得て來た詩想から、すべての秋の哀みを思つて、何かそれを適當な形に盛つて見たいと言つて居た。

『まあ、いゝぢやないか。もつと話して行つて呉れたまへ。』

と、言つて青木は寺の外まで二人に隨いて來た。

『狂になつた女が毎晩この邊をうろ〳〵する。なんでも君、貧に迫つて自分の子供を殺したんださうだ。僕はその話を按摩から聞いた……實際住んで見ると、いろ〳〵なことが出て來るね……住み憂くない場所といふものは全く少いものだね……』

こんな話をしながら青木は町の角まで隨いて來た。

青木に別れた後の捨吉はそのまゝ、菅とも別れて直ぐに家の方へ歸りたくなかつた。長い品川の通りを札の辻の方へ歩いて、二人して何か物食ふ場所を探した。長いこと沈鬱な心境を辿り、懊惱と煩悶との月日を送つて來た捨吉には、齷齪とした自分を嘲り笑ひたいやうな心が起つて來た。嚴肅な宗教生活を送つた人達の生涯を慕ふ傍から、自分の内部に萠して來る狂じみたものを、自ら恣にしやうとして而もそれが出來ずに苦しんで居るやうなものを奈何することも出來ないやうな心が起つて來た。何か斯う酒の香氣でも嗅いで見たら、といふ心さへ起つて來た。斯の心は捨吉を驚かした。彼はまだ一度も酒といふものを飲んで見たことが無かつたから。

斯うした初心なもの、食慾を滿すやうな場處は、探すに造作もなかつた。ある蕎麥屋で事が足りた。

『菅君、お酒を一つ誂へて見やうかと思ふんだが、賛成しないか。』

腰掛けても座つても飲食することの出來る氣樂な部屋の片隅に、捨吉は友達と差向ひに座を占めて言つた。

『お誂子をつけますか。』

と、姉さんがそこへ來て訊いた。

『君、二人で一本なんて、そんなに飲めるかい。』

と、言つて菅は笑つた。左樣いふ友達はもとより盃なぞを手にしたことも無い人だ。言ひ出した捨吉はまた、何程誂へて可いかといふこともよく分らなかつた。一合の酒でも二人には多過ぎると思はれた。

捨吉は手を揉んで

『ぢや、まあ、五句にしとかう。』

この捨吉の『五句にしとかう。』がそこに居る姉さんばかりでなく、帳場の方に居るものまでも笑はせた。

五句誂へた客は簡單に飮食されるものがそこへ運ばれて來るのを待つた。

『青木君も君、交際つて見るとなか〳〵面白い人だらう。』と捨吉は青木の噂をして、『この前、僕が訪ねて行つた時は女の人も來て居てね、三人であのお寺の裏の方の廣い墓地へ行つて話した。その女の人は結婚の話の相談にでも來て居たらしい。斷らうか、斷るまいか、といふ容子をしてね。古い苔の生えた墓石に腰を掛けて、ぢつと考へ込んで居たあの女の人の容子が、まだ眼についてるやうた……一體、青木君には物に關はないやうなところが有るね。あそこが僕等は面白いと思ふんだけれども……』

『兎に角、變つてるね。』

『あそこが面白いぢやないか。奇人といふ風に世の中から見られるのは可哀さうだ。誰かそんな評をしたと見えて、青木君がしきりに氣にして居たつけ——「僕も奇人とは言はれたくない」ツて。』

斯樣な話をして居るところへ、誂へたものが運ばれて來た。捨吉は急にかしこまつて、小さな猪口を友達の前に置いた。ぷんと香氣のして來るやうな熱燗を注いで勸めた。一口嘗めて見たばかりの嘗はもう顏を濕めてしまつた。

『生れて初めて飮んで見るか。』

と、捨吉も笑ひながら、苦い〳〵酒を含んで見た。咽喉を流れて行つた熱いやつは腸の底の方まで浸み渡るやうな氣がした。

嘗は快活に笑つて、

『青木君で僕が感心したのは——僕もあのお寺は初めてぢやないからね——ホラ、若い書生のやうな人があのお寺に居たらう。あの人が僕に話したよ。自分はもうこの世の中に用の無いやうな人間だ、青木君なればこそ自分のやうなヤクザなものを捨てないで斯うして三度の飯を分けて呉

れるんだッて——ね。彼樣いふ人を世話するところが青木君だね。」

斯うした噂が盡きなかつた。

僅か一つか二つの乾した猪口で二人とも紅くなつてしまつた。

『何だか頰邊が熱つて來たやうな氣がする。』

と、言つて、やがて友達と一緒に歸りかけた頃は、捨吉の心は餘計に沈んでしまつた。

青木はよく引越して歩いた。高輪から麻布へ。麻布から芝の公園へ。その度に捨吉は何かしら味のある言葉を書き添へた葉書を田邊の家の方で受取つた。捨吉が日頃愛讀する英吉利の詩人の書いたものゝ中から、あるひは抄譯を試みたりあるひは評釋を試みたりして、それを吉本さんの雜誌に寄せる度に、青木からは友愛の情の籠つた手紙や葉書を呉れた。青木が芝の公園内へ引移る頃には短い月日の變際とも思はれないほど、捨吉は斯の年長の友達に親しみを增して行つた。

ある日、捨吉は新しい住居の方に青木を見やうとして出掛けて行つた。その時の彼は吉本さんが彼の爲に心配して呉れた新規な仕事に就いて、一小報告をも齎して行つた。

早い春の陽氣は復た回つて來て居た。溫暖い雨は既に一度か二度通過ぎた後であつた。霜の溶けた跡にあらはれた土を踏んで行つて、捨吉は芝の公園内から飯倉の方へ降りやうとする細い坂道のところへ出た。都會としては割合に高燥な土地に、林の中とも言ひたいほど樹木の多いところに、青木の新居を見つけた。岡の傾斜に添ふて一軒の隱れた平屋があつて、まだ枯々とした樹木の枝はどうかすると軒先に屆くほど延びて來て居た。

青木は漸く自分の氣に入つた家が見つかつたといふ顏付で捨吉を迎へた。狹くはあるが窓の明るい小部屋でも、古くはあるが草庵のやうな靜かさを有つた屋根の下でも、皆捨吉に見せたいといふ顏付で。

『今日は君も好いところへ來て呉れた。操の奴が子供を連れて實家の方へ行つたもんだから、お婆さんと僕とでお留守さ』と青木は捨吉の前に坐つて言つた。

親類のお婆さんといふ人はそこへ茶なぞを持運んで來て呉れた。

『子供が居ないと、矢張寂しいね。』

と、復た青木がそこいらを見廻しながら言つた。

心の置けない青年同士の話がそれから始まつた。逢ふ度に青木は自分の有つ世界を捨吉の前に展けて見せた。『僕はこれで眞實に弱い人間だ、小さな蟲一つ殺しても氣になる。』とか、『僕には友達といふものは極く少い、しかし左樣澤山な友達を欲しいとも思はない。』とか、『僕は單なる詩人でありたくない、thinker と呼ばれたい。』とか、左樣いふ言葉が雜談の間に混つて青木の口から引繼ぎ引繼ぎ出て來た。沈思そのものとでも言ひたいやうな青木は、まるで考へることを仕事にでもして居る人物のやうに捨吉の眼に映つた。

『時に、僕は吉本さんの學校の方へ、教へに行くことに成つた——ほんのお手傳ひのやうなものだがね。』

と、捨吉が言出した。

『四月から教へに行く。出來るか出來ないか知らないが、まあ僕もやつて見る。』

とも附加した。

其時、青木は捨吉に見せたいものが有ると言つて、窓のある小部屋の方からナイトの注譯をしたシエクスピア全集を、幾册かある大きな本を重さうに持つて來た。欲しい〳〵と思つて漸く横濱の方で探して來たとも言ひ、八圓か出して手に入れたとも言ふその古本を捨吉の前に置いた。それを置きながら、

『へえ、君が教へに行くとは面白い。隨分若い先生が出來たものだね。』

と、青木は戲れるやうに言つて笑つた。

小半日、青木は捨吉を引留めて、時には藝術や宗教を語り、時には苦しい世帶持の話をしたり、世に時めく人達の噂なぞもして、捨吉をして歸る時を忘れさせた。ある禪僧の語錄で古本屋から見

つけて來たといふ古本までも青木は取出して來て、それを捨吉に讀んで聞かせた。青木は聲を揚げて心ゆくばかり讀んだ。

堅く閉塞がつたやうな心持を胸の底に持つた捨吉は、時には青木に隨いて屋の外へ出て見た。奈何いふ人が住んだ跡か、裏の方には僅かばかりの畠を造つた地所もある。荒れるに任せたその土には早や頭を持上げる草の芽も見られる。

『ホラ、君が來て呉れた高輪の家ねえ。あそこは細君に相談なしに引越しちやつた——あの時は酷く怒られたつけ。』

『青木君、山羊はどうしたね。麻布の家には山羊が二匹居たね。』

『あの山羊ぢやもうさんざんな目に逢つた。山羊は失敗さ。』

話し〳〵二人は家の周圍を歩いて見た。

『でも、一頃から見ると溫暖に成つたね。』

『もう斯の谷へはさかんに鶯が來る。』

枯々とした樹木の間から見える藪の多い淺い谷底の方はまだ冬の足迹をとゞめて居たが、谷の向ふには、薄青く煙つた空氣を通して丘つゞきの地勢を成した麻布の一部が霞むやうに望まれた。藪のかげではしきりに鶯の啼く聲もした。春は近づいて來て居た。

耳の遠い、腰の曲つた青木の親戚のお婆さんは夕飯を用意して捨吉を待受けて居て呉れた。味噌汁か何かの簡單な馳走でも、そこで味ふものは樂しかつた。

四月から始める新規な仕事、麹町の方にある吉本さんの學校のことなぞを胸に描きながら、捨吉は斯の青木の住居を出て、田澤の家の方へ戻つて行つた。青木の許へ捨吉が寫して行つた一身上の報告は小竹のお婆さんをも悦ばせた。獨りで東京の留守宅を引受けるほどのお婆さんは、六疊の茶の間を勉強部屋として捨吉に宛行ふほどのお婆さんは、最早捨吉を子供扱ひにはしなかつた。これから捨吉が教へに行かうとする麹町の學校は高輪の淺見先生の先の細君が礎を遺して死んだその形見の事業であるといふことなぞを聞取つた後で、一語、お婆さんは捨吉の氣に成るやうなことを言つた。

『女の子を教へるといふのが、あたいは少し氣に入らない。』

女の子――それは捨吉に取つても長いこと觸れることを好まなかつた問題だ。無關心を裝つて來た問題だ――無關心はおろか、一種の輕蔑をもつて對つて來た問題だ。

深い感動として殘つて居た心の壁の畫が捨吉の胸に喚起された。再び近づくまいと堅く心に誓つて居た繁子――坂道――日のあたつた草――意外なめぐりあひ――白い肩掛に身を包み無言のまゝ通過ぎて行つた車上の人――一切を捨吉はあり〳〵と自分の胸に喚起すことが出來た。過ぎし日の果敢なさ味氣なさをつく〴〵思ひ知るやうに成つたのも、實にあの繁子からであつた。忘れやうとして忘れることの出來ない羞恥と苦痛と疑惑と悲哀とは青年男女の交際から起つて來た。何等の心のわだかまりも無しに、奈樣して斯の捨吉がもう一度『女の子』の世界の方へ近づいて行くことが出來やう。

麹町の學校での捨吉の受持は、英語、英文學の初歩などであつた。屆いた小竹のお婆さんが捨吉のために學校通ひの羽織、袴を用意して呉れる頃は、一度淡い春の雪も來た。小父さんは横濱の

店の方から、捨吉の兄は大河端の下宿から、眞勢さんはまた東京の方の勤めに戻ることに成つたといふ大勝のお店から、いづれも問屋廻りや用達の序に稀に見廻りに來る位のもので、其他はしんかんとした留守宅の庭も、庭の樹木も、一度あの白い綿のやうな雪で埋められたかと思ふと、一晩のうちにそれが溶けて行つて、新しい生命の芽が餘計にその後へあらはれて來た。おツつけもうその庭も花と若葉の世界に變らうとして居た時だ。時々屋根の上を通過ぎる濕ぽい雨の音を聞きながら、捨吉は四月の來るのを待つた。